

平成 21 年 4 月 17 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19530098
 研究課題名（和文） 日米における憲政政治——共和主義的公共哲学を中心として——
 研究課題名（英文） Constitutional Politics in Japan and United States——Focus on Republican Public Philosophy
 研究代表者
 氏名（ローマ字）：小林 正弥（KOBAYASHI MASAYA）
 所属機関・部局・職：千葉大学・法経学部・教授
 研究者番号：60186773

研究成果の概要：

本研究においては、ハーバード大学のマイケル・サンデル（Michael Sandel）教授の *Democracy's Discontents—America in search of a Public Philosophy*（Belknap Press,1996）の翻訳プロジェクトを進めると共に、マイケル・サンデル教授を招聘した国際シンポジウムを開催し、「憲政政治」についての世界的な水準での理論的検討を行なった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：政治学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：憲法政治、共和主義、公共哲学、政治学、民主主義

1. 研究開始当初の背景

研究開始の当初から、日本国憲法をめぐる政治的動向は、重要な局面を迎えていた。2000年に衆参両議院に設置された憲法調査会が終了し、自民党の改憲草案も公表されたので、現実に憲法改正が行われる可能性が高まっていたのである。日本政治は、まさにアッカーマンの言う「通常政治」の時代から「憲法政治」という新しい段階に突入したと言えるものであった。

ここにおいて、これまでのように「憲法」と「政治」がばらばらに考察されるだけでなく、この二つを統合的に考察する「憲法政治」の概念を考察することが重要となっていた。しかし、当初においてこの概念についての研究はほとんどなされていなかった。そこで、本研究では、こうした問題状況に対して学問的に貢献するために、「憲法政治」について多角的に検討し、主権・人権・平和・自由・

平等・正義・公共性といった概念を再検討しつつ、実践的な憲法政治の理論を構築していくことを目的に掲げたのである。特に、憲法政治の概念が提起された現代アメリカの共和主義的理論を吟味した上で、日本の憲法政治・憲政・立憲主義などの概念と比較しつつ、日米の憲法政治について包括的に考究することを行った。

2. 研究の目的

当初においては、日本における憲法政治の研究は始まったばかりであり、その学際的検討は全く未発達の状態にあった。勿論、憲法論自体は数多く存在していたが、政治学的な考察をも含めたものはわずかであった。そこで、本研究においては、下記の事柄の積極的に推進していくことを行った。第一に、この考え方の基本書となるサンデルの『民主政の不满』の翻訳をすること。第二に、彼を日本に招聘して、討論を行い、日米の憲法と政治の関係について検討を行うこと。第三に、サンデルやアッカーマンなどのアメリカの憲法理論については、研究分担者のアメリカ法の専門家（金原恭子）が法学的な観点から検討を行う。第四に政治と憲法を一緒に考察する「憲法政治」という新概念を正面から主題とし、改憲のような極めて重要な課題を学問的に考究する。第五に、これまでの公共哲学の知見から、憲法政治の研究をさらに進展させる。そもそも憲法は、何らかの公共哲学が基本法として制定されたものである。そのため、公共哲学がもっとも政治において先鋭的に表れるのが、憲法政治なのである。研究代表者（小林）と研究分担者（一ノ瀬）は、日本における公共哲学研究に当初から関わってきた。以上の3-5点について研究を行い、その成果を広く一般に公表した。

このような研究を通じて、日本における憲

法政治を学問的に発展させると共に、現実の憲法政治そのものにも重要な学問的示唆を与えることができた。本研究においては、アメリカの共和主義的理論を考究することによって思想的な前進を図ると共に、日本の憲法政治の現実にも実践的で有益な政治理論を構築することが行われたのである。

3. 研究の方法

平成19年度においては、研究全体の総括を研究代表者の小林が行った。本研究においては、「憲政」の概念や公共哲学、さらにアメリカの政治哲学にまで精通している小林を中心として、研究分担者がそれぞれの分野の専門に応じてサポートしていく体制がとられた。まず、研究分担者の金原は、アメリカ法の専門家であり、アメリカの憲法理論に詳しい。そのため、金原は、アメリカの憲法理論との関係について主に研究を行った。次に、研究分担者の一ノ瀬は、政治思想史・公共哲学の観点から、双方の理論についての概念整理を行った。それぞれの研究者の間では、緊密な意見交換を行なわれ、相互の連携が築かれた。事務局は、千葉大学公共哲学センターにおかれ、その事務的作業については一ノ瀬が担った。

平成19年度の研究においては、まず研究協力者の間で「憲法政治」の現状についての共通認識を作るため、このテーマに関する資料・情報・文献（一次・二次）の収集が行われた。資料収集は、それぞれ分野を分担して行った。公共哲学、憲政関連の文献については、小林、一ノ瀬が担当し、アメリカ憲法やアメリカ政治については金原が文献の収集を担った。これらの文献を千葉大学公共哲学センターに集め、その分析を行った。

各国の研究施設での資料収集を行うための海外へと渡航した。小林、一ノ瀬、金原は

アメリカに渡り、アメリカ憲法やアメリカ政治についての資料収集を行った。

また、こうした資料収集とその解明と並行して、憲法政治に関する重要文献の翻訳も進行させた。小林と金原、一ノ瀬は、憲法政治に深く関わるサンデル『民主主義の不满』の翻訳を行い、この翻訳のために週2回の頻度で翻訳ミーティングを開催した。

平成20年度においては、マイケル・サンデル教授を日本に招聘した国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムは、日本における「憲法政治」の議論を活発化させることを目的としたものである。そのため、一般の人々にも公開され、日本の憲法政治についての学問的成果に立脚した現実的議論を展開した。

本研究においては、自民党による憲法改正の動きを注視した上で、学問的観点からの議論を提起してきた。また、憲法政治の現状についての市民への啓蒙活動も行った。

さらに、これらの研究会成果の一部は、『公共研究』に掲載され、「憲法政治」の議論の成果が公表された。この『公共研究』に掲載された論文は、千葉大学図書館にリポジトリ登録され、ウェブにおいて一般の市民や学生たちにも広く公表されている。

4. 研究成果

平成19年度は、ハーバード大学のマイケル・サンデル教授の *Democracy's Discontents—America in search of a Public Philosophy* (Belknap Press, 1996) の翻訳を進めると共に、平成20年度に予定されているマイケル・サンデル教授を招聘して行なう国際シンポジウムの打合せのためにアメリカに渡った。その結果として、極めて重要な知見を得ることができた。アメリカのワシントン D.C.では、コミュニタリアンのアマタ

イ・エッツィオーニが主導するジョージ・ワシントン大学のコミュニタリアン政策研究所 (Institution for Communitarian Policy Studies) を訪問し、アメリカのコミュニタリアニズムの最新の文献や資料を手にいれることができた。次に、ボストンにおいては、アメリカ憲政史の起源を辿り、自然環境保護の理論を提起したラルフ・エマーソンや、ヘンリー・ディビッド・ソローなどの「超越主義」の理論家たちが大きな影響を与えていることを知ることになった。また、ハーバード大学においてマイケル・サンデル教授と会談し、平成20年度に行なう国際シンポジウムの企画の内容について意見を交わした。さらに、サンフランシスコにおいては、ロバート・N・ベラー名誉教授と面会し、憲法政治における「市民宗教」(civil Religion) の役割についての意見を交わした。

その他にも、三重中京大学の菊池理夫教授を招聘した研究会「コミュニタリアニズムの可能性」を開催し、この研究分野の日本における最高とも言える議論を繰り広げた。このようにして、来年度に開催するマイケル・サンデルを招聘する国際シンポジウムのための準備を進めた。

平成20年度は、引き続きハーバード大学のマイケル・サンデル教授の著書の翻訳を進めると共に、マイケル・サンデル教授を日本に招聘して国際シンポジウムを開催することに成功した。

このシンポジウムのために、日本においてほとんど議論されてこなかったコミュニタリアニズムについての研究会を行ない、サンデル教授を招聘するための準備を行ってきた。2008年9月21日に研究会「コミュニズムからコミュニタリアニズムへ」を開催した。この研究会には、三重中京大学の菊池理夫教授と鈴鹿医

療科学大学の青木孝平教授を招聘し、政治学と経済学の両面からコミュニタリアニズムの理論について検討した。その報告の一部が、『千葉大学 公共研究』（5巻4号、2009年）に掲載されている。

そして、遂に2009年3月20日にマイケル・サンデル教授を招聘した国際シンポジウム「アメリカの公共哲学：コミュニタリアニズムと共和主義」を開催することができた。このシンポジウムには、マイケル・サンデル（ハーバード大学）と小林正弥（千葉大学）を始めとして、井上達夫（東京大学）、五十嵐武士（東京大学）、菊池理夫（三重中京大学）、三浦信孝（中央大学）、伊藤洋典（熊本大学）、蕭高彦（中央研究院・台湾）、中野剛充（千葉大学）が報告し、マイケル・サンデル教授との直接的な対話を行った。

まず、マイケル・サンデルと小林正弥が基調講演を行い、それに対してアメリカ政治の観点から五十嵐武士が、さらにフランス共和主義の観点から三浦信孝がコメントをした。第一部では、井上達夫と菊池理夫が報告し、「リベラルーコミュニタリアン論争」について再考した。第二部では、伊藤洋典と蕭高彦が報告し、共和主義的政治理論について議論した。このようにして、マイケル・サンデルの理論をめぐる世界水準の議論を展開した。

『民主主義の不満』の翻訳は、現在のところ出版されていないが、最終稿の段階にある。そのため、勁草書房から近刊される予定となっている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

- ① 一ノ瀬佳也「コメント ユートピア主義とコミュニタリアニズム」『公共研究』5巻4号、2009年3月、69-73頁、査読有り。

（<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/ReCPAcoe/komentoichinosel.pdf>）

- ② 小林正弥「近代的学問方法論を超えて——多次元・多位相・多水準の友愛公共学へ」『公共研究』5巻2号、2008年9月、30-44頁。査読無

（<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/ReCPAcoe/52kobayashi2sp.pdf>）

- ③ 小林正弥、第1章「公共主義的政治腐敗論——新構造主義的政治的恩顧主義論の観点から——」河田潤一編著『汚職・腐敗・クライエンテリズムの政治学』、2008年、3-37頁。査読無

- ④ 小林正弥「比較文明論と歴史公共哲学——地球的文明へのビジョン」『千葉大学公共研究』第4巻4号、2008年3月、17-42頁。査読無

（<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/ReCPAcoe/44kobayashi.pdf>）

〔学会発表〕（計1件）

- ① 小林正弥「『市民性の教育』の理念と課題：コミュニタリアニズム的共和主義の観点から」日本政治学会（関西学院大学）、2008年10月12日。

〔図書〕（計2件）

- ① 小林正弥、第1章「公共主義的政治腐敗論——新構造主義的政治的恩顧主義論の観点から——」河田潤一編著『汚職・腐敗・クライエンテリズムの政治学』、2008年、3-37頁。

- ② 小林正弥、千葉眞編著『平和憲法と公共哲学』晃洋書房、2007年、総298頁。

[その他]

小林正弥、項目解説「憲法と憲政、憲法政治」
加藤尚武編『応用倫理学事典』丸善株式会社、
2008年1月、488頁-489頁。

小林正弥「コミュニタリアン・ネットワーク
と政策研究所の現状」、「ブログ 公共哲学の
風」

URL:[http://ameblo.jp/public-philosophy/
entry-10080438555.html](http://ameblo.jp/public-philosophy/entry-10080438555.html) : 2008年3月28日

参照。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 正弥 (KOBAYASHI MASAYA)
千葉大学・法経学部・教授
研究者番号:60186773

(2) 研究分担者

金原 恭子 (KIMPARA KYOKO)
千葉大学・大学院専門法務研究科・教授
研究者番号 : 90261891

一ノ瀬 佳也 (ICHINOSE YOSHIYA)
千葉大学・大学院人文社会科学研究科・
COE フェロー
研究者番号 : 20422272

(3) 連携研究者

無し。